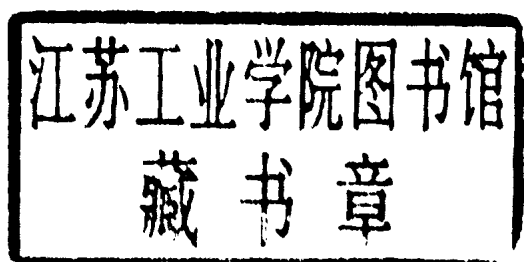


とおりゃんせ

とおريانسه



序

中里 富美雄

私と平雄一さんとの出会いは、私が講師をつとめた浦和市民大学のエッセイ講座に、平さんが参加された時に始まる。

最初の日に自己紹介をして戴いた時に、工務店を経営しておられると伺ったが、その後、平さんの沢山のエッセイを拝見しているうちに、工務店の仕事よりも、碁会を開き、ダンスを楽しみ、菜園で野菜を作り、余暇にエッセイに没頭するというような、謂わば「人生探検」の方に生甲斐を持っている方のように私には思えてきた。それほどに平さんのエッセイは題材が多彩である。

しかも、どの作品にも、ひ弱そうに見えながら実際には逞ましく生きてきた平さんの半生の哀歓が凝縮されていて、素晴らしい人生を生きている方だと羨ましく思う。

題材もさることながら、平さんの文章には気取りがなく、しかも簡潔である。それでいて、ほのほのとした情感がにじみ出ている。

それがエッセイの本領なのだが、平さんはそういうエッセイの要諦を、もう充分に身に付けているように思う。最近作「夫婦旅」^{めおと}「碁の有る人生」を読むと、特にそういう感じを強くする。

講座が終了したあと、有志による自主グループが誕生して、毎月一回勉強会を持っているが、それにも平さんは積極的に参加して、豊富な体験を作品に書き続けて来られた。

しかもその都度ユニークな発想、洒落た手法で作品に取り組んで、仲間に見張らせた。たとえば「美しいもの」「金髪のジェニー」「ずぶぬれ」などは、平さんらしい工夫の跡がうかがえて面白い作品である。今までの三年間に書きためた作品の中から、自選の二十三編を収めたと平さんは記しているが、これだけ粒選りの作品を書きあげるには、矢張り三年間の歳月が必要だったろうと、改めてそのご精進ぶりに敬服する。

エッセイ集「通リゃんせ」の上梓を心からお祝いし、今後一層のご精励を念じてやまない。

ガチャン

『トザカナミカ』『ウデフジモシ』

小学三年生のころ、電車通学をしていた私は横書きされた駅名を逆さ読みして、その語感を嬉しがっていたものである。都会育ちの私には、通り過ぎる駅や車窓の家やビルなどが、そのまま故郷の山であり、川であり、森であった。

もっと小さいころ、四つか五つぐらいの時には、母の実家があった上中里が私にとって現実に故郷の駅であった様だ。

駅の出口は東南向きの一つだけ。正面に真つすぐ延びた道は、線路沿いに行き行った所で、その線路にかかった長い陸橋を渡る様になつてゐた。駅から右手の高台の方へ行くと、やがて大きな本郷通りに入る。その右手前にあるのが平塚神社である。境内の隅に溜まったふかふかした落ち葉の感触と売店の塩大福の味こそ、私にとっての故郷の味であつた。

た。幼稚園へ行く時はいつも『ミコちゃん』が誘いに来てくれた。ちっちゃくて、目のくりっとしたかわいい子だった。あの幼稚園はどのへんだったろう。残念だけど思い出せない。

神社から本郷通りを霜降橋の方へゆっくり下りはじめたあたり、左側に小さな駄菓子屋があった。今地図で見る小学校よりもっと手前だったと思う。

その日、母と駒込の方から歩いて来た。駄菓子屋の『ガチャン』、今のパチンコに似た幼児用のゲーム機なのだが、そのガチャンがやりたくて、母から一銭貰うと、走って行って機械に取り付いた。

銅貨を入れたが玉が出ない。私の訴えで、母が店の主人に掛け合ったが話を通じない。玉が出ない筈はないと、言い争いになってしまった。ひどいことを言われたのだろう、若い母は泣き出してしまった。その時突然、幼い私に真相がひらめいた。

さつき母からお金を貰って機械に駆け寄ったとき、入れ違いに機械から離れて、坂を駆け下りて行った小さな男の子がいたのだ。あの子が玉

を持って行ってしまったに違いない。そう思い到って坂下の方を見ると、果たしてあの子が両親を連れて、得意そうにこちらへ向かって来るところではないか。

事件解決、私は勢い込んで母に説明しようとしたのだ。所が何ということだ。いつもの母の様子ではない。歯を食いしばり眉を逆立てて、恐ろしい顔をしている。私の声が全然耳に届いてない様だった。それでも私は必死に訴え続けたのだが、母は一言も返事をしてくれない。ついには、邪険に私の手を引っ張って、実家の方へ歩き出してしまった。

母は十人もの兄弟の一番上で、すぐ下には二才ずつ年下の弟が三人続いて居た。その叔父達が憤ったのは当然だったが、そこでも私の解説は全く無視された。

「ユ一坊、確かにお金を入れたんだな」

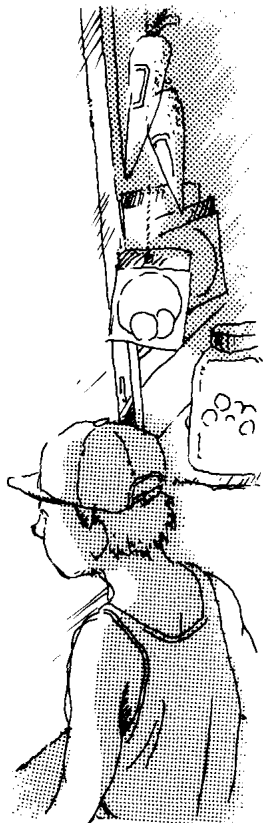
その返事だけが証言として採用されただけらしいので、その夜の私はすっかりふてくされてしまった。

私にとってこの話はこれで終わったのだが、母から聞かされた後日談

がある。あの夜、叔父達三人に押し掛けられ、無理やり謝らせられたあの駄菓子屋の主人は、その後も店の前を睨みながら通る叔父達に、すっかり居心地が悪くなったらしい。その暮れに店を畳んでしまったと言う。母の脚色で無いとしたら、ずいぶん気の毒な話である。

しかしそれ以来、私は二度とガチャンをやらせてもらえなかった。駄菓子屋へ行くことさへ禁じられた。母はだんだん山の手の奥様風になって行き、近ごろ言う教育ママの様にもなってしまった。

下町の感じが残る上中里の母の実家の付近が好きだったから、故郷という言葉に触れる度に、私はこの幼いころの妙な事件を思い出してしまう。



赤羽

山手線の田端から渋谷までの十二の駅、それに接した赤羽の方の六つの駅が東京育ちの私のホームグラウンドである。十八の駅がみんなそれぞれ街を持っていて、一つ一つの思い出がその駅の名と一緒に浮かび上がって来る。駒込や巣鴨には長い間住んでいた。高田馬場には親友が居り、目白には初恋の人の家があった。今でもこの目白と言う駅名には、あの人を諦めた時の悲しい思いが染み付いている。

幼稚園は北区の滝野川だった。私がひ弱な身体だったため、医者に勧められて引越する事になったのだそう。空気の良いところへ住みなさいと言われ、転地療養の意味での赤羽への引越しだった。幼稚園の友達、ちっちゃな『ミコちゃん』と別れるのだけが少し悲しかった。今の人なら赤羽が空気が良い所と言うと、不思議に思うだろう。なしろ五十年も前だ。その頃はただただ臭い田舎町だった。

駅の西側、線路に沿って南に伸びた商店街は狭く、地方の街道筋の宿場町といった雰囲気であった。たった一つの映画館が「地元出身の名士、リーガル千太、万吉様ご出演——」とマイクで宣伝しているのを聞いて、気取りやの母が鼻先でフンと馬鹿にした。

五分ほど歩いて右側に、マルセ糸店と言う洋品店があつた。その手前を入れて突き当たりに農家の様な大きな家があつて、それが大家さんだつた。庭に門構えまでした家が建っていて『二階家』と呼んでいる貸家だつた。

小学四年まで私はそこに住んだ。大家の長男『ブンちゃん』は私の同級生だったし、糸屋の娘『レイコちゃん』も色は黒かったがなかなかかわいい子だった。遊び友達の多い、良い子供時代だったと思う。蕎麦屋の『シンちゃん』や角の『タダちゃん』とはベーゴマやメンコに熱中した。兵隊ゴッコではサーベル、竹刀、ほうき、はたきなどを総動員して、駅の向う側東口まで行ったものである。東口は何もない原っぱで、軍隊の演習用地だったらしい。ざんごう有り小高い盛土有りで、兵隊ゴッコ

には最高の場所であった。

休みの日には、父が荒川の土手へよく連れて行ってくれた。大きな河、橋、そして水門などが私の初めて見る新しい世界だった。そしてまさしく良い空気だった。赤羽に住んだ四年間で私はかなり普通の身体の子供になれたと思っている。

高校時代、アルバイトで水門のそばの建設省砂防研究所へ勤めることになった時は、赤羽のまちが本当に懐かしくて嬉しかった。その頃の東口にはもう賑やかな町並が出来はじめていて、砂防へ卒論を書きに来ていた東大生に連れられて、生意気にも『いけ増』でビールなど飲んだものである。

更に十年後、義弟が公団住宅に当たって赤羽台団地に住んだ。訪ねてみたら、西口の北の方にある高台であった。団地と言う所は妙な街である。歴史のない所に突然大きな町が現れる。新しい人ばかりが大勢暮らし始める。昔の様子など思い出すきっかけも残してくれない。

義弟の部屋を借りて、団地の子供達に『茶』を教えたことがあった。

教え子の中学生の姉妹が、夏休みに田舎の祖母の家で数日を過ごして来たと言う。住まいの印象を尋ねたら、

『あんな出入り口ばかりで壁の無い家なんて落ち着けないわ』

『自分の座るところと言うか、居る場所がない感じなのよ』

と二人が口を揃えた。成程さすが団地育ち、私など三日も居たら天井が低いのと窓が少ないのとで閉所恐怖症になりそうな気がする。

それにしても赤羽は変わった。殊に東口の賑やかさにはびっくりさせられる。一番街やスズラン通りを歩いて、五十年前のドブ臭い田舎町や何もない原っぱに思いを駆せて感慨にふけってしまう。



禁じられた遊び

五月の日曜日、あまり冷たくなさそうな雨が、朝からずっと降り続いていた。七歳の私はのが渴いて台所へ入ろうとした。何だか妙な感じがして立ち止まってしまふ。流しに向かつて居る女中のしてやが、しきりに割烹着の袖で目を拭っている様子だ。泣いている、と思った。母は弟を連れて外出中である。涙を拭っているしてやの割烹着の袖がなんだか汚れている様に見えて、私は茶の間に引き返した。整理ダンスから新しいタオルを出して持って行つてやる。

「何なの、ユウちゃん」

私を見下ろしたしてやの目は私の思ったとおり真つ赤だった。彼女はしばらく私とタオルを交互に見比べて居たが、急に意味が判つて顔をくしゃくしゃにした。

しゃがみこんでくると、してやは右手に持ったタオルと左手で私の顔

を挟んでつくづくと眺めた。そして驚いたことに、まるで母がする様に、自分の頬を私の頬に押し付けて来たのである。

水仕事をしていたしてやの手は冷たかった。そして寄せて来た彼女の頬はその反対に母よりもっともっと熱かった。

「こういう優しいユウちゃんが、好きよ」

嬉しいのと恥ずかしいので、もうぼーっとしてしまった私は、してやの手をやつとの思いで振りほどくと、ふらふらと二階へ逃げ上がった。直ぐ水を飲み損ねた事に気が付いた。前にもまして、のどはからからだだった。でもしてやの居る台所へは戻れない。うろうろとのぼせた頭で部屋の中を歩き回って居たら、父のお氣に入りのパイプの椅子の上に、大好きな羊の毛皮があるのを見付けた。

これは父の勤め先の会社が持つて居る千葉の末広農場で、試しに鞆させたものだそうだ。父も私もそろってひつじ年生まれなので、我家の宝ものといった存在だった。

興奮のさめていない私はその羊の毛皮を頭からかぶると、目が見えな

いままで、又部屋の中を歩きだした。少し怖いけれど面白かったので、すぐ熱中してしまった。なじみの机や、たんす、花瓶などが不思議な生き物の様に、感覚的になった指先に語りかけて来る。

箏箏とサイドボードの間に普段は気にも留めていなかった三十センチたらずの隙間が有った。毛皮をかぶったまま、私は身体を押し入れた。少しくつい。体を横にしたまま奥へ押し込む。厚い毛皮が重なったから、身体が宙に浮いた。面白がつてもがいているうちに、横倒しそれも頭が少し下、という状態になった。

苦しい、だけどなんとなく良い気持ち。眠りにつく時や、高熱の時などに経験したあの感じだ。こうした時、私にはとっておきのお呪いが有る。唱えさへすればすぐおだやかな幸せな気持ちになれると言うあれである。

『マリア、ストロドフスカ。マリア、スクロドフスカ——』

キリスト教のマリア様ではない。愛読書のキューリー夫人伝の中で覚えた、キューリー夫人の幼名なのだ。彼女の苦学の様子、なかでも寒さ

に寝付かれず毛布のうえに椅子をのせてやっと眠れた、という所など、身体が震えるほど感動したものだ。本当の貧乏など想像も出来ない、幸せすぎる私の少年時代の話である。

味をしめてその後も度々『宇宙遊泳』を繰り返していたが、ついに母に見つかりこっぴどく叱られる羽目になった。勿論家具も移動され、あの懐かしい異次元空間とは二度と巡り会えない事になった。

『してや?』彼女は貧しい家に生まれ、『すて』と名付けられたのに、役場に届けに行った者が訛ったので『して』になってしまったのだという。そのしてやはその年の秋、我が家から嫁に行った。向島の職人の家だったと聞いている。

気味悪い話

小学二年の時だったと思う。理科の実験でクラスの中で蚕かいこを飼った。蚕が大分大きくなった頃、明日はみんな紙箱を持って来なさいと言われた。次の日はクラス中大喜びで、私も三匹の蚕と桑の葉の入った菓子箱をささげ持って家へ帰って来た。

箱の中に敷き詰めた桑の葉の上で、忙しそうに食べ続ける蚕の姿は本来に見飽きしない。私があんまり長く見入っていたせいだったからか、お八つを持って来た母は、机の真ん中を占領している菓子箱をのぞき込むなり

「いやね、きび（気味）が悪いわ」

と、さもさも嫌らしそうに顔をしかめて見せた。持って来た紅茶のお盆をいつまでも蚕の隣へ置いてくれないので、私は仕方なく蚕の箱を床へ下ろした。